

シエムリアップ Moi Moi ライフ

ISSUE
107

「Moi Moi」とはクメール語で「ひとつずつ、ゆっくりと」の意味。恵み豊かなカンボジアでのスローライフをお届けします。



小出 陽子 (Yoko KOIDE)

1992年早稲田大学大学院卒。一級建築士。2000年、UNESCO/JSA 遺跡修復オフィス建設のため、カンボジアに赴任。2005年シエムリアップにレストラン Cafe Moi Moi をオープンする。同年JST (NGO: アンコール人材養成支援機構) を設立し、農村地域の支援活動始める。2013年「アンコールの都の西北」に公立のバイヨン中学校を創設。2019年には高校も併設され、現在、全校生徒 630 人の学校運営を行っている。

● JST ホームページ
<http://www.jst-cambodia.net>

サイクリングブーム

カンボジア国内での新型コロナウィルス感染不安がやや収まり始めた4月初め、シエムリアップでは、アンコール・トム王宮前広場やアンコール・ワット環濠周辺などで、ピクニックやバドミントンなどを楽しむ家族連れや若者たちが増えてきました。さらに、クメール正月が終わり、他州間の移動禁止令が解かれた後は、夕方になるとアンコール・トム南大門を入りする車両の長い行列ができ、遺跡警察による交通整理が行われるほどとなりました。

特に最近多く見られるようになったのは仲間たちとマウンテンバイクに乗る老若男女。サイクリングスーツを着ている人も多く、皆、格好はかなり本格的で、特にアンコール遺跡大回りコースの舗装道路は快適なサイクリングコースとなっているようです。また、アンコール・トム外周壁上の小道も人気で、どこまでも続く森と環濠の雄大な風景を見下ろしながらの一周12キロのコースは爽快そのものに違いありません。



こうして、それぞれのスタイルで遺跡を楽しむカンボジアの人々の姿は、20年前には考えられなかった光景です。カンボジアの学校では、今でも遠足や社会見学会といった活動がないため、子供たちは遺跡に触れる機会が全くといっていいほどない状況ですが、思い返せば、アンコール遺跡群が世界文化遺産として登録され、観光地として注目され始めた2000年代以降も、カンボジアの人々は遺跡どころではない生活を送っていたのです。アンコール遺跡群はいつも外国人観光客でにぎわっていましたが、地元の人々は、観光客へのサービスを行う黒子の役割に徹していたということに、改めて気づかされました。

外国人観光客ゼロによる経済的ダメージは計り知れませんが、しばらくは地元住民が自分たちの祖先から受け継いだ遺産を独占して楽しんでほしいとも思う今日この頃です。